
パネルディスカッション

パネリスト：上杉 和央（京都府立大学准教授）
 黒田 乃生（筑波大学大学院教授）
 野原 大輔（砺波市教育委員会主任）
司 会 ：奥 敬一（富山大学准教授）

(奥) それでは、時間になりましたので、後半のパネルディスカッションに入っていきたいと思います。パネルディスカッションの時間は45分ほどです。できれば会場の皆さんからのご質問などもお受けしたいと思いますが、それは後半の方に取っておいて、まず最初にこちらの方から設定したお題が幾つかありますので、前の方の4名のパネリストで少し議論を始めてみたいと思います。

今日のこの並びなのですけれども、上杉さんは当然富山県には住んだことのない県外の方で、文化的景観の専門家という位置づけ、役割です。黒田さんは、大阪？

(黒田) 転勤族です（笑）。

(奥) ということで、大阪その他いろいろのご出身です。ただ、富山には研究でずっと足しげく通われて、ある程度ご存じだという立場です。野原さんは地元のご出身、行政にも勤めておられて、先ほどお話しいただいたように、地元の問題も赤裸々にいろいろなものをご存じというお立場になります。私はといいますと、昨年富山に来たというお話をしましたが、生まれは石川県でして、そういった意味で北陸に関してはビギナーではありません。何となくちょっと隣から見ているという感じで富山を見ていたわけです。このような構成で、それぞれそういう視線の持ち主だということでご理解いただきたいと思います。

この位置づけを分かっていた上で最初に議論していきたいのは、内側の人からのまなざしと外側の人からのまなざしという話をしたいと思います。今日は文化的景観とはこういうものだという話と、富山県の資源としてはどんな景観があるのかという筋立てで行きましたが、まずは外から来られた上杉さ

ん、黒田さんから見て、野原さんや私が紹介したような富山の文化的景観の話
を聞いた上で、これまでお持ちだった富山の文化的景観のイメージが実際に当
たっていたのか、こんな奥深いものがあったという発見があったのか、そういっ
た富山に抱いている文化的景観のイメージですね。まずはそういったものを少
しご紹介いただこうと思います。上杉さんの方からお話しいただけますでしょ
うか。

(上杉) 私の前座的な話の後に、富山の三つのお話を聞かせていただきました。五
箇山と砺波については、県外とはいえ、さすがに知っていますし、五箇山も砺
波の散村も遊びに行ったことはあります。それで行くと、奥さんの話は、「そう
いうものもあるのだな」ということですごく新鮮に感じました。

全体を通じて富山の面白さは何なのか。険しい山があって、そこから流れ出
てくる川があって、海があるというセット、日本だとどこでもそうといえばそ
うですが、コンパクトな富山県の中に全部が入っているのはすごく面白いと感
じています。今日は「かがやき」に乗ってきたのですが、黒部川があったり、
常願寺川があったり、ここに来ると神通川があって、庄川があったりというこ
とで、香川県出身の私からすると、水量の多い川がなんと幾つもあるのかと感
じるわけです。

そういう大きな枠組みのなかで、少し小さな単位というのも面白いと思いま
した。先ほどの梨の風景や柿の風景というのは、丘陵もあって、平野もあると
ころです。富山であれば立山連峰などの高い山が常に強調されがちなのですが、



じっくり入ってみると、丘陵と平地の関係や、川が作った小さい自然堤防との関係など、そういう少し小さい感覚での自然と向き合ってきた人々の暮らしというのが面白いなということ、先ほど3人の講演者の話を聞きながらずっと感じていました。

私は香川県出身なので、一番印象が強かったのは川なのですけれども、その川、水と丘陵や山などとの関わり合いというのが富山の文化的景観を読み解く基本的なまなざしになるのかなと感じました。

(黒田) 砺波平野の散村は有名なので、知っているのですけれども、私は五箇山に行くので、通過してしまうのです。たまにふらっと観光で行くぐらいです。まとまった話を伺ったのは今日初めてだったので、よく残っていることにとにかくびっくりしました。奥さんの話も、菅笠の風景や柿や梨がこんなふうに残っているのだなと感心しました。それから、スギなどいろいろ面白いものがしっかりと残っていることにびっくりしました。全国そうなのですが、ものすごい勢いで昔のものがなくなっているので、今まで残っているというだけでもすごいことだと思うのですが、それが今後どうなっていくのかが、散村も含めてすごく気になるころではあります。

あとは、上杉さんから、いろいろな地形があって、山から海にということをお話いただいたのですが、その土地土地でそれぞれの土地に合ったおいしいものがあって、風景を作り出しているのがお米であり、柿であり、五箇山には赤かぶがあるのですが、梨もあって、すごくいいなと思いました。先ほどお昼ご飯を食べながら「文化的景観はおいしいですね」という話を上杉さんがされていたのですが、まさに富山はそういうおいしい文化的景観の場所なのだと思います。以上です。

(奥) ありがとうございます。上杉さんからはコンパクトな中に収まっている山から川、それが里などにつながり、その中で立山に比べると目立たないかもしれないけれど、少し小さな自然や川との関係が結構濃厚なのだなという感想をいただきました。黒田さんからは、今でもこれだけしっかり残っているということ自体が驚きだというお話でした。そのことに加えて、風景というのは恐らく食べるという要素がすごく大きいと思いますけれども、そういったところがもしかしたら富山県の文化的景観の魅力として実はすごく大きいのではないかなという趣旨の発言だったかと思います。

それを受けて、県内にお住まいで、県内の仕事をずっとされてきた野原さんの立場からすると、こういった意見はどういうふうに聞こえるのか。もしかしたら、ご自分の感覚とギャップなどもおありになるかもしれませんので、その

辺の受け止めを少しご紹介いただけると。

(野原) 率直に言うと、よその人の意見だという感じですかね。それは私ではなくて、恐らく地元の人ほどそれを強烈に言われると思います。一つは、私はよく言われるのですが、「景観で飯が食えるか」と言われるのです。これは本当に鋭い言い方だと思います。例えば建物を直して、入館料収入を得て、それで維持されるやり方があると思うのですが、景観だとそういう地域経済に貢献する仕組みが作りにくい部分があって、そこら辺は難しいということを日々感じています。

そういう話を抜きにして、県外の方は割と「砺波の散村はすてきですね」「素晴らしいですね。家屋が大きいですね」「チューリップとの景色が美しいですね」と言われるのですが、地元の方は全然思っていないのです。それが当たり前なので、美しいと思っていないのです。これを残さなければいけない風景だと、ほとんどの人が思っていないのではないかと思います。

ただし、散村の保全活用の調査をやったのですが、そのときアンケートをして、この景色を残すべきですかと質問すると、7割ぐらいの人が「残すべき」と言うのです。しかし、それを残すために例えば規制したり、そういったことをしてもいいですかと聞くと、ほとんどの方が反対なのです。総論では賛成するけれども、各論では反対するところがあります。

自分たちが住んでいる景色は、小さいころから見て育っているものですから、あらためて今、「この景色に価値がありますよ。すごいですよ」と言っても、価値観の転換はすごく難しく、「そんなのは当たり前ではないか。昔からこれだし、これが崩れていこうが、生活することの方が大事なので、このままでもいいではないか」と言われる方がいらっしゃいます。

ですから、価値観を転換してもらおうアクションを起こすこと自体がすごく難しいのと、例えば仕組みとして今の景観が残るようなシステムを作っていくことがすごく難しいのではないかなと思います。今の文化財保護法の制度の中ではある程度効果があるかもしれませんが、なかなか難しいです。突っ込んで言うと、他の文化的景観は割と人が住んでいないところが多かったりします。千枚田や棚田や牧草地帯などに比べて、散村というのは人がそこで生活していたり、根づいていたりしますので、その点で非常に難しいのかなと思います。

(奥) まさに「景観で飯が食えるか」という話が出ました。私もいろいろな地域で景観の話をするのですが、非常によくある反応の一つとして出てきます。でも、こういった景観に関わっている人がこれだけ多く出てきている。そこには何かしら時代の要請があるのだらうと思っているわけです。そのあたりを上杉さんに

お聞きしたいのです。多分、上杉さんもこういった反応を何度も体験しておられると思うのですが、どういうふうに戻されるのか。

(上杉) 「景観で飯が食えるか」というのは、本当にそのとおりですね。ただ、私がよく言っているのは、先ほどの気づいていないという話も含めてなのですが、地域の人に気づいてもらわない限り食べませんというの、またあります。そして、先ほどの言葉で言うと、「地域らしさ」に気づくだけでは駄目です。野原さんのアンケート調査でも、地域の方は気づいておられるわけですよね。でも、気づいているだけでは駄目で、そこに誇りを持ってもらえるところまで行かないと。「この地域らしさで飯を食うのだ」というところまでいかない。

昨日、実は法政大学でシンポジウムがあって、そこで今は価値観が変わりつつある過渡期なのだろう、という話が出ていました。というのは、近世までの前近代というのは、何がいいか、何が悪いかというのは感覚だけで判断していた時代だったということです。例えば先ほど宇治の話をしました、宇治茶というのは何もなくいいというただそれだけだった。だけど、近代になると例えばお茶の品評会などがあって、色味はどうだ、味はどうだ、何煎出するのかというような客観的と思われるような基準の下で経済的な指標に価値を付け替えてしまっ、それでしか判断しなくなってきたわけです。

それは結局、同じ答えを求めて、全国のお茶産業が同じような味を求めてしまったのです。それが近代以降の流れです。ただ、それが行き詰まりを見せていくのが1960～70年代、日本でいう高度経済成長期にいろいろなものが一緒になってきてしまっ、どうしようとなった。これは世界レベルでもそうですね。世界遺産の話は黒田さんにしていただいた方がいいのかもしれませんが、実は文化的景観という価値観や概念は世界遺産の方に先行してありました。1992年にカルチュラル・ランドスケープができました。これは世界中で同じような価値観を求めてしまっ、世界中で同じような景観ができていくことによる危機感があっ、そうではない近代的な価値観ではないものを求めていく時代を作らねばならないという覚悟が世界的に醸成されてくる。その中の一つとしてカルチュラル・ランドスケープができていくということが大きな前提としてあります。

私たちはその過渡期にいるわけですから、基本的には経済的な論理で動きたくなる気持ちはとても分かります。だけれども、地域の個性は残さないといけないことにも気づいています。その二つをうまく両立させていくことを考えなければいけない時代だと思うのです。だから、景観か、飯かという二者択一というか、そういう感覚をまず変えなければいけないというのが一つです。特に行政の人にはそう感じてほしい。野原さんは分かっておられると思うのですが、

他の一般の人でいうと、経済のことばかりです。結局、経済を押し進めていったところは、そこで疲弊してしまったわけです。

私のお話の最後に、まちづくりの方向性を挙げましたが、これまでは常に成長のラインでしか考えてこなかったわけです。これは逆に言えば、未来のことを全く考えていない戦略です。未来に行ったら、どうやっても枯渇していくことが分かっているのに、それをやってしまうような戦略を取ってしまうということです。そうではなくて、うまく生きていく。これまでずっと生きてきたのだから、これからも生きていけるような戦略を立てていくことが必要になってきて、そのときに必要になるのが地域の個性だということ、浸透させていくことが大事だろうと思います。

もう一つ、野原さんの中でいつもよく聞くという話でしたが、「残したいけれども、規制は嫌だ」という話です。これは恐らく、先ほどの野原さんの資料でいくと、砺波市が保存活用調査を2006～2008年に行い、スタートダッシュはとても良かったということで、スタートダッシュのときに調査しているから、そういうようなことも逆に言うと起きてきたのだと思うのです。というのも、よくわかっていなかったからです。文化的景観制度が始まる前に調査が始まったところでは、砺波市のように、足踏みをしているところは実は幾つもあるのです。

それに対して、後発のところはそういう先輩方を見習って、規制という感覚ではない仕組みを考えているわけです。つまり、規制というのは上から目線です。上から押しつけて、「これは駄目です」とするのですが、例えば自分の家を建てるときに自分の「やりたい」という思いがありますね。その思いがその「地域らしさ」の範囲に入っていれば、誰も規制とは思わないわけです。

つまり、思いを作るときに地元の人の中に「地域らしさ」の誇りがあれば、その思いの中に収まる確率はとても高いのです。だから、規制を作るのではなくて、「地域らしさ」、文化的景観の価値の部分にこそ重点を当てるべきで、そこがしっかりと醸成されたので文化財にすればいいという発想になってきたのが後発組なのです。

だから、後発組の中には、住民の方たちの自主規制というかたちもでてきています。自分たちで自分たちの地域を良くしよう、という位置づけをしていくことです。文化的景観はそういうものを目指すべきです。だからこそ、文化的景観は文部科学大臣からの指定ではなくて、下からの申し出によって選定される仕組みになっています。ちょっと長くなりました。

(奥) ありがとうございます。もうちょっとゆっくと進めようと思っていたのですが、いきなり核心部分に行ってしまいました(笑)。

同じように残したい中で、ものすごく強い規制でもある世界遺産になってしまったところをよく見ている黒田さんですけれども、例えば五箇山でも、白川郷でも結構ですし、あるいは他の所でもいいのですが、そういった規制が非常に厳しくかかるような人の住んでいる場所が、一体どういうふうにそれを乗り越えようとしているのか、あるいは乗り越えていったのか、そういったお話を少しいただくとありがたいです。

(黒田) 文化的景観は選定という話でしたが、実はもう一つ重要伝統的建造物群保存地区という文化財の種類がありまして、これも自分たちで市町村が守ることを決めて、それを国が選ぶという同じようなパターンになっています。世界遺産の白川郷も、五箇山の相倉、菅沼も重要伝統的建造物群保存地区になっています。

今は「景観で飯が食えるか」みたいな話だったのですが、世界遺産の白川郷は1970年代に住んでいる人が自分たちで守ることを決めたのです。それは文化財になる前だったのですが、そのときも同じような議論がありました。住んでいる人のグループのうち、戦争から帰ってきて、「これから白川は何で食べていくのだ」となったときに、合掌造りで食べていこうと決めて、住民一人一人を説得して回って、それで保護を決めたのが世界遺産になっている荻町集落です。

そのときにもう一つ、芦倉という集落が近くにありました。文化庁の人がそこを見に行った時には、立派な合掌造りが5棟残っている素晴らしい集落でした。「文化財にしよう」と文化庁の人が言った途端に、そういう規制は困るので建物を一斉に壊したのです。江戸時代からずっとあった5軒のうち、今住まわれているのは1軒だけです。そんなふうにするのを決めるのはものすごく痛みを伴うというか、想像もつかないようなエネルギーで守ることを決めて、その後世界遺産になったのが良かったのか、悪かったのか、それはまた別の話になってしまうのですが、いずれにしても大きく運命が変わったということなのです。

ですから、言えることは、文化的景観という文化財にすることで、ちょっと地域の方向が変わるということです。先ほど上杉さんがグラフで示されていましたが、多分あのグラフがぐっと下に行くのか、経済的にはゆらゆら進むか、というふうにベクトルが変わるのが一つです。もう一つは、当たり前のことなのですが、人が大事ということです。荻町でも、守ると決めた人が全員を説得したので、今の荻町があります。意外に一人一人の力がすごく大きいのです。

だから、野原さんがものすごい勢いで頑張って、野原さんの味方が地域にどんでんきていけば、何か動くとは私は確信しています。茨城にもとても良い場所があって、「文化的景観にしませんか」と言っているのですが、行政の人は

全く反応がありません。どんなに素晴らしい場所でも、人がいなければ後はどんどん壊れていくのみなので、ぜひ(笑)。とりとめのない話になっていますが、よろしくをお願いします。

(奥) 「景観で飯が食えるか」という話に対しては、私も一つよく使う答えを持っていて、「景観もなければ入ってくる人はいない」という話がある意味真実ではないかと思っています。もちろん景観だけではなく、他の要素もいろいろ条件が整わないと入ってこないのですが、地域らしさや帰ってくる意味がない場所になってしまった所に人は帰ってこないし、わざわざ選んで住もうと思わないわけです。そういった意味では、景観があって初めて、帰ろうと思う場所ができてくるかもしれない、あるいは住もうと思う場所ができるかもしれないので、飯うんぬんだけではなくて、将来この地域が続くのか、続かないのかということも含めて、もしかしたら景観というのは大事な要素なのかなと私自身思っています。

野原さんには続けて問題提起役をしていただきたいのですが、野原さんの方から、住んでいる人たちの考え方を考えるのはなかなか難しいというお話がありました。野原さんご自身はそういった砺波の散村のライフスタイル自体の価値みたいなものを見直そうという活動もされていて、非常に地道な取り組みも同時にされているわけです。そのあたりも紹介いただきながら、さらにその先に横たわる課題や苦悩があれば少しご提示いただければと思います。いかがでしょう。

(野原) そうですね。文化的景観が言われるようになって、2004年にあらためていろいろ考えたら、皆さんは散村のことを知らないのです。例えばバスツアーなどをして、市民の方に「散村というのはどんなものですか」と聞いたときに「家が点々としている」くらいしか言えないのです。「どうしてそれが成り立ったのですか」「砺波平野の中でどこに重点的にそういうものがあるのですか」と聞いても分からないのです。それで最初に作ったのがこのパンフレットです。取りあえず散村のエッセンスを凝縮したものが必要だということで、パンフレットを作ったわけです。

あとは学校の副読本がありまして、砺波市独自に社会科の副読本があるのです。その中ではもちろん散村のことを非常に大きく取り上げるのですが、それを副読本の最初に持ってきたのです。とにかく砺波市にとって一番大事なものとして、最初のぶち抜き巻頭カラー6ページに散村を持ってきたのです。それで子どもたちへの周知は結構しています。それから、ふるさと探訪授業といって、小学5～6年生になると必ず散村を勉強します。社会科以外の時間にそう

いう時間を持っています。そういったところで、子どもたちに対してはだいぶ今やっているのではないかと思います。

ただ、ネックなのは大人です。大人はなかなか難しいという部分があります。そうしたときに、古いけれども新しい価値観で見直すと、いいものが結構あるではないですか。例えば伝統的家屋にしても、古い価値観でいると、寒いとか管理しにくいということがありますが、砺波らしさの象徴でもありますし、非常に広い家屋でもあって、住みよいです。古い文化を見直そうということで、『砺波ライフスタイルブック』を作りました。家屋編やお祭り編、料理編などいろいろ作っているのですが、そういったものも総合的に文化として発信できるのではないかと思います。特に僕よりも若い世代の人に見直してほしいとっていて、そういったものも作っています。その他にいろいろとやっているのですが、最近ではそういうことを地道にやっているところです。

課題をどうしたらいいかということなのですが、先ほどの白川郷の話でも、この村はどうしていくかという瀬戸際に立って、そういう声が起こってきたと思うのです。でも、砺波は今も人口増が進んでいます。それから貯蓄率がすごく高くて、豊かです。ですから、観光に振り切るわけでもありません。皆さんは非常に豊かな生活をしているので、危機感が全くないのです。景観を守っていくという動機づけというか、その辺がすごく難しいと思います。先ほど、誰か声を上げる人が一人いればいいという話でしたが、そういう人がなかなか出てこないのです。僕が言ってもすごく空しく響いてしまい、難しいところがあります。私はそもそも景観の担当に一回もなったことがありませんから、そういう立場でもないですし、非常に難しい部分があるということです。

文化的景観の部分が進んでいないのは、一番の問題が行政の中にあります。文化的景観にすると住民にとっては規制になってしまうし、市にとってもメリットがないではないかという固定観念のようなものがなぜか出来上がってしまっていて、その辺が非常にネックになっているので、行政の内部から切り崩していかないといけない。文化的景観をやると舵を切れれば割とスムーズに行くのではないかと思います。

なぜかというと、景観まちづくり条例ができて、その中でモデル地区を作っています。それは市の方と地元の方で協定を結んで、その協定を結んだ地区には、その地区を運営するに当たって幾ら、枝打ちをするのに幾らというふうに補助が出たり、いろいろ恩恵があるのですが、そういう地区が4地区あります。それが今年、もう2地区ほど増えそうなので、6地区になります。それは地元の方から協定を結びたいと市に言ってくるものなので、ある程度そういう町内会単位ですが、そういう地区は砺波平野の中にありますので、そういったところを重文景観の選定エリアにして広げていけば、モデルケースとなって、徐々

に増えていくのかなという観測はあります。ちょっとまとまりのない話ですが、そんなところですよ。

(奥) ありがとうございます。豊かであるが故に危機感がちょっと薄いのではないかというお話もありました。上杉さんから、そのあたりはいろいろなところを見た経験でアドバイスできるところ、あるいはそういう価値をうまく住民に伝えるような方法があるのかどうか。そんなところを少しお願いします。

(上杉) 先ほどお話いただいたように、危機感がないのは本当にそのとおりです。その意味では砺波の散村は豊かなのでいいのですが、それが故になくなる価値が出てくるのは難しいなと思いました。先ほども野原さんからお話がありましたが、地元の方が気づかないのはどこでも同じことですが、そのときに大事になってくるのが外からのまなざしです。例えば黒田先生の取り組みで、五箇山に学生を連れて行って、学生が「わあ、すごい」と言うと、地元の方は多分、準備は大変だけど、それで気持ちよくなってきて、「うちの集落はいい所なんやな」と思えてくるということです。そういう若い人を使ったり、他の地域の方から見たときの感想が地元の方に入ってくると、少し気持ちが変わるというところはあるのかと思います。砺波の場合も、先ほど展望台に結構人が来るようになったという話がありました。行政的に言うと、もう少しそこをくすぐってあげることが必要なのかもしれない。

一方で、モデル地区の話聞いて、ものすごくいいことだと思いました。いただいた散村のリーフレットを見ると、確かにものすごく広くて、これを一気に文化的景観というのは難しいけれども、先ほど私が申し上げたように、「地域らしさ」はコミュニティの中で守るとするのが基本なのです。

このコミュニティというのは、もちろん市全体も一つのコミュニティといえるのですが、基礎単位としていわゆる自治会レベル、町内会レベルが大事です。モデル地区でいい方向に向かい始めると、その隣が「うちもやろうかな」ということが出てくることもあると思います。行政的にはそこをバックアップしてあげることが大事ですね。モデル地区の事業が始まっていると私は初めて聞いたので、それはとてもいいことだし、そこにチャンスはあるという気がします。

もう一つ言うと、文化財としての文化的景観にするというのは、あくまでも一つのツールであって、唯一の方向ではない、というのがあります。このまま砺波の散村が続くのであれば、そして、地域の人々がそれを文化財にしなくてもいいと思うのであれば、それはそれでいいのかな、とも思います。大事なのは「地域らしさ」が残ることであって、文化財になることではありません。最後に来てひっくり返すようですが、そういうことを少し思います。

文化財にすると、補助金が出ます。補助金が出るかわり、先ほど規制はないと言ったけれども、そこにある程度の枠がはめられることは確かです。極端に振れてしまうのはやはり NG なわけです。「地域らしさ」の持続に、どのようなツールを使うかは、その地域の考え方だと思います。

(奥) 文化庁なり、その他にいろいろな規制というか、保護の制度があるわけですが、本当に何を使ったらいいのかというのは地域がちゃんと考えて決めるべきだという話だと思います。

黒田さんの方から、世界遺産もそれが良かったかどうかみたいな話がありましたけれども、いかがですか。

(黒田) まさにそのとおりで、行政のいろいろな制度というのはツールなので、自分たちの住んでいる場所をこれからどういうふうにしたいか、そのためには何が一番いいのかというのを考えるのが大事です。世界遺産になりたい地域は本当に全国にいっぱいあって、私は時々話をするのですがけれども、世界遺産もツールなのです。だから、世界遺産になったから、それで終わりではなくて、世界遺産を利用して、地域をこういうふうにしていくという考え方が必要なのではないかと考えています。

(奥) ありがとうございます。世界遺産を目標として頑張っているところがある。そのことを通していろいろな議論が起きて、それで地域に波及効果が起こる。それで、最終的に世界遺産にならなくても、非常にいい形ができています。そのような流れも最近は少しずつ出てきているのではないかという気がしています。このようなアドバイスやコメントに対して、野原さんの方からコメントありますか。

(野原) 返答ですか。頑張りますと言うしかないです(笑)。ただ、外からのまなざしの話なのですが、外からも言われまくっているのです。「散村は素晴らしいよ」と言われまくっているのです、逆にそれも麻痺してしまっているのです。例えばいろいろな週刊誌などの巻頭カラーで、ばーんと散村の写真が出るのです。でも、「まあ、出るよね」というそんな感じなのです。載ったという感激がないのです。しかも京都大学や東大などいろいろな大学の偉い先生がしこたま来るわけです。その先生方に「素晴らしい」と言われても、全く鈍感になっています。だから、その辺もちょっと難しいという部分があります。

ただし、先ほどの地域らしさといったところに訴えるのは一つすごくいいなと私は思いました。必ずしも重文景観にならなくてもいいという話なのですが、

僕は必ずやりたいと思っています。なぜかという、条件はもうそろっているからです。選定の条件はほとんど満たしているのに、もう一步のところまで足踏みしているのです。これはならない手はないのです。ですから、どうしてもそこだけは何とかしたいと思っています。

(奥) どうもありがとうございました。すっかり砺波の応援のようなディスカッションになってしまいましたけれども、時間がだいぶ残り少なくなってまいりました。会場の方から、もちろん砺波のことに限らず、今日の話題として出た文化的景観全般に関して質問やご意見などがもしございましたらいただければと思いますが、いかがでしょうか。では、どうぞ。

質疑応答

(フロア) 私は人文学部で文化人類学を教えている教員の藤本と申します。調査実習で昨年度は福岡町の方に学生を連れて行き、今年度は南砺市の方、砺波平野もそうですけれども、連れて行ったりしています。今日の話もいろいろ出てきて、興味深く伺っていました。あまり長くならないようにしたいと思うのですが、地元の方たちが私に言うのは、菅笠といったものを続けていくことの大変さを強く言われます。それは経済的に割に合わないということが現実的にあると思います。ただ、そうは言っても、残さなければいけないという意識がすごくあって、私もそういうことで学生に積極的に調べてもらうようにしています。

その中で、地元の方たちの認識というか、簡単にはいかないという話がありましたけれども、例えばもしかしたら大学の教員やそういう者から「これはすごいんだ。だから、頑張ってください」と言われても、確かにそういう方たちに響かないのかもしれませんが、ただ、結構私を感じるの、学生がすごく関心や興味を持って、自分たちが感動しながら調べているのは、地元の方たちにはかなりうれしいということがあるのではないかと。だから、教員が調べるのと学生が調べるのでは、地元の人たちには全然うれしさが違うというか、そういうのをちょっと感じながらやっています。ですから、積極的に学生を使っています。

それから、もしかしたら観光の経済的な効果をイメージしますけれども、雑誌などで取り上げられることも大事だとは思いますが、先ほどの地元の方たちの認識という意味では、一番大きいのは経済的な効果ももちろん大事な部分があると思いますけれども、景観の場合にはそのことを観光客が地元の方たちに話して感想などを伝えることが結構大事なのかなと思います。雑誌などで大きく立派なことが書かれているよりも、その素朴な感想を伝えられることが一番ありがたいことなのかもしれないと思います。そういう素朴な交流が一番大

事なのではないか。学生だったり、そういう人たちとの交流が一番励ましというか、そういう部分で大きいのではないかと、このことをちょっと感じたりしています。

- (奥) ありがとうございます。ご質問というよりはご提案、ご意見ということだったと思います。われわれ大学に勤めている者としては、やはりそういった形で地域と一緒にできることをいかに考えていくか。あるいは地域に寄り添っていくかというのが一つ大きなテーマとして、これからの地域づくりの中に横たわっていると思うのです。そういった中で、今日テーマにした文化的景観をどう考えるか。あるいはその裏側というか、それを支えているなりわい、生業、生活をどう支えていくかは非常に大事なことだと思いますので、またいろいろな学部なり分野で協力して、新しい試みができたら面白いのではないかと思います。

これで時間が来てしまいました。もしかしたらまだご意見など発言したかった方がいらっしゃるかもしれませんが、本日はこれにて終わりたいと思います。基調講演から話題提供、そして、パネルディスカッションとお付き合いいただきました3名の講演者の方に拍手で感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました(拍手)。それでは、これでパネルディスカッションを終了したいと思います。